

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520708
 研究課題名（和文） 近代における女性教育と衛生観の形成—婦人雑誌情報のデータベース化
 研究課題名（英文） Formations of “female education (女性教育)” and “outlook on hygiene (衛生観)” in modern age.—Making to data base on women’s magazines information.

研究代表者
 倉石 あつ子 (KURAIISHI ATSUKO)
 跡見学園女子大学・文学部・教授
 研究者番号：60316669

研究成果の概要（和文）：現代日本人の衛生観を形成する基礎となった近代女性の衛生観の形成について近代の婦人雑誌や女性教育者態の思想を本に衛生観の形成過程を検証する。使用データは可能な限りデータベース化し、成果として多くの研究者に供するよう努める。なお、数多く出版された婦人雑誌の中から、本研究は女学生を対象として出版された『女学世界』『貴女の友』を中心としたデータベース化に努めた。

研究成果の概要（英文）：

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：民俗学：女性学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：教育 衛生 身体 婦人雑誌 近代 女性

1. 研究開始当初の背景

現在、抗菌ブームであり、無菌状況に近いほど衛生的であると考えている。「衛生」という語は我々には既に所与のものとして存在するが、その概念は明治期に形成されたものであり、現在のような清潔・衛生的などを使用している内容とは異なり、医療制度として使用され始めたものであった。医療制度としての内容を把握するとともに、そこに含まれる清潔感などは、どのように我々庶民にしらしめられたのかを明治期に刊行された女性向け雑誌記事を分析することによって、明らかにしてみたい、というのが本研究開始の発

端である。特に家政を預かるものと考えられた女性たちに、医療制度としての「衛生」より清潔観やそれを維持するための方法が、どのように植え付けられていったのかを考えることが発端である。

2. 研究の目的

上記の発端の考えを背景とした本研究は、最終的には、現在の我々の生活にある衛生観とどう繋がってくるのかを検討することにある。

3. 研究の方法

大きく4つのことについて並行して資料収集・分析に当たることとした。

(1)医療制度としての「衛生」の成立と変遷を長与専斎の活動を中心に検討する。

(2)明治期の教育制度の成立(学生発布)・教育目的・教育内容における男女差の発生等、明治期の教育状況を把握することにより、明治という近代がどのような女性像を求めていたのかを明らかにする。

(3)上記のような状況の中で、明治期に出版された女性向け雑誌は、女性たちにどのような「衛生観」を与えたか。明治期に出版された女性向け雑誌の中から特色的と思われるいくつかの雑誌を選択肢し、「衛生」という語に関わる記事を抽出し、まずはそのデータベース化に努める。同時に、それらの記事を使用し、当初の医療制度としての「衛生」との意味するものの異同を分析する。

雑誌選択は明治期に出版された女性向け雑誌のリストアップを行い、その中でデータベース化する雑誌の絞込みを行った。特に読者数が多かったもの、「衛生」関係の記事の多いもの、刊行時期・刊行期間を勘案し、『貴女の友』と『女学世界』をデータベース化することとした。データベース化にあたってはキーワードの検討を行い、二つの雑誌を共通した構成のデータベース化にするよう心がけた。

(4)民俗学等の聞き取り調査報告書、および紀行文などを見ることにより、「衛生観」の成立の地域差、階層差等、理想と実態のずれを検証すること。

紀行文はイザベラ・バードの『日本奥地紀行』が優れた民俗資料となりうるので、当該書を使用した。

4. 研究成果

明治期の教育とその変遷

「学事に関する被仰出書(おおせいだされしよ)」には、国民皆学を目的とし、6歳になった男女は就学させねばならない旨が明記されている。児童に学問を授けることは、それぞれの児童の将来の財本となるからであると考えられた学制の高邁な理想であった。しかし、既に寺子屋などの機能が働いていた地域では、寺子屋の教育で十分であるという考え方や、女兒には学問は不要といった庶民一般の考え方もあり、就学率はなかなか上がらなかった。

造が否応国民階学を目指した学生の発布であったが、前述のように女子の就学率は上がらず、女子の就学率が50%を超えたのは、日清戦争後と言われている。また、男女差なく誰もが教育を受けることを目的とした学制であったが、一方では富国強兵のために、男子には1873(明治6)年徴兵令が発令され、戦う男子とその後を守る女子という構な

く作り出される状況が生まれる。さらに1889

(明治22)年には徴兵制度が改正され、男子の皆兵が義務付けられることになる。こうした状況は、女子に兵士となる男子を産み、丈夫に育てることが、女子にとっては何より大切な勤めであり、そうしたことを成し遂げた女子(女性)は尊敬に値する存在であるといった考え方が支配的になっていく。こうした社会的な動きの中で、次第に教育面でも男女差が設けられるようになり、1879(M12)年の教育令では、小学校を除き男女別学の方針がとられるようになる。また、教育内容も次第に変化し、1881(M14)年小学校中等科以上では、女子に裁縫・家事経済が必修となり、女子ができなければならない仕事を想定した教育内容へと変化し、良妻賢母・婦徳の重要さなどが強調された教育内容となっていく。つまり、女子教育は学制発布当初の「男女は平等に教育を受ける」ことができるといった高邁な理想から、女子と男子を区別し、次第に性別に分けて各性の特色を強調する(させられる)教育内容へと変質していくことになる。

就学率が上がらない状況が続いている明治20年代ごろまでに、現在でも女子大学として継続している教育機関の基礎が作られた時期も、同時期である。これらの女学校の教育の多くは女子の高等教育を目的としてはいるが、その多くが「女性らしさ」「母となるための女性の知育・徳育」「家政を治めるための女性」といった内容も盛り込まれており、学校によっては作法やマナーを学ぶ科目が並存している。女子はあくまでも子を生み育てることを前提とした存在であることが大前提としてあり、そうした大前提に沿っての教育が行われていたことが、さまざまな解説を加えるまでもなく理解できるのは、義務教育の制度における男女別の教育方針が採られるようになったことをみても、くどくどしい説明は不要であろう。

明治期に出版された女性雑誌

こうした教育状況を背景に、明治期にはさまざまな副教材としての錦絵の販売や雑誌の発刊がなされるが、多数の女性向け雑誌の発刊もこの時期の特色と言うことができよう。女性向け雑誌の最初の発刊は明治10年の『子育ての草紙』に始まるとされているが、三鬼浩子はその発刊主体・出版状況により明治末年までの36年間を4期に分類している。

- 1、明治10年代(1877~87)
- 2、明治20年代(1888~98)
- 3、明治30年代前半(1899~)
- 4、明治30年代後半から(1903~12)

である。本研究ではこの分類にしたがって、いくつかの雑誌を取り上げてみていくこととする。明治期の雑誌は、明治10年2月か

ら9月にかけてに出版された『子育ての草紙』に始まるといわれている。婦人を対象にした最初の雑誌であったが、その緒言（なるべく現代仮名遣いにした）には

「凡そ人の母たる者は、其子を發育訓導するの道を知らざるべからず 人の賢愚と身体の強弱とは其母の養育訓導によれば其任務たる甚だ重し 然れども世人率ね其任務の重きことを知らずして之を誤る者少なからず豈悲志まざるべけんや 此回此書を作る所以の意は此等の人を志て小児養育の大旨と母たる者の任務を知ら志めんが為め専ら婦人の解し易きを主と志て俗語を用いたれば看る者幸に其拙陋を尤むること勿れ」

と述べ、この書は女性として子供を産み育てるための心得を分かり易く書くことを目的としていると主張している。典型的な良妻賢母を育成するための書と見ることができるが、育児に関わる内容は当時の新しい西洋的な方法も取り込んでいると見ることができる。明治22年11月に出版された松田敏足著『女小学躰草』もこの流れを汲む1書と見てよからう。こうした一方で、明治10年代終わりから20年代にかけて、キリスト教精神に基づいた男尊女卑の思想から女性を解放し、人として男女同等の位置に立たしめるという理想をかかげる男性たちによる女性向け雑誌が出版され始める。『女学新誌』『女学雑誌』『女学叢誌』『日本之女学』など実に160種ほど出版されているが、いずれもその刊行期間は短い。そうした中で『女学世界』は博文館から1901（明治34）年発刊、1925（大正14）年6月の終刊まで、全350冊を数える長寿雑誌であった。編集者は板垣退助・西村茂樹・棚橋絢子・成瀬仁蔵といった人々であった。第1号の目次は口絵・写真・書画の手本・論説・古典文学の講義・伝記・学術・家庭小説・文芸・技芸・娯楽・社交・流行・学事といった内容であり、良妻賢母育成を目指す総合教養雑誌と見てよいだろう。発刊の辞を読めばその目的は明らかであり、「女子は家を治めるもの、夫を助けるもの、子を育てる大任を有するものである」と明確に位置づけている。『女学世界』の発刊目的の背景には、明治30年代にはいつて女子高等教育の必要性が説かれ、教育機関が漸次設置されていくとともに、明治維新以来の女子教育政策や教育思潮が欧化主義をとってきたことへの反動や国家主義的風潮が大きく影響している。いわば明治初期からの西欧化思想への揺り戻しと見ていいだろう。『女学世界』は西欧化主義から日本文化固有の良さを見直しへ回帰するという特色を持っている。こうした総合雑誌の記事の中に、衛生に関わる記事はどのくらいあるのか、西洋的な医療制度が確立された3

0年余を経て、その成果はどのような知識として女性たちに知らしめられたのか。衛生にかかわる事象で女性が求められたことは何だったのかを、記事の中から衛生にかかわる語彙を抽出しながら分析した。

実態としての庶民の衛生観

しかし、一方では上記のような教育や雑誌の恩恵を受けられない、地方の農山村に暮らす人々も多く、その実態は雑誌などの情報によって生活を作り上げたり改善できたりする都市部の生活とは異なっていた。そうした状況の報告は民俗学の聞き取り調査に予定多くの資料の蓄積があるが、そのほか、明治初期に日本を訪れ北海道のアイヌ集落まで渡る旅をしたイギリス人女性 イザベラ・バードの『日本奥地紀行』、モース『日本その日その日』、ビゴー『日本素描集』など外国人が見た日本の資料も枚挙に暇がない。

例えば、バードは旅の各所で以下のような描写をしている。

例1 「畳は柔らかで弾力性があり、質の良いものはとても美しい。畳は最上のブラッセル絨毯ほど高価であり、日本人は畳を非常に誇りにしている。だから心無い外国人たちが汚れた靴で畳の上に踏み込むようなことがあればたいそう困ってしまうのである。不幸なことだが、畳には無数の蚤がついている」（第六信 P78）

例2 前略 ふつう私は午前三時に寒くて眼をさます。私のかけている毛布は夏用のものばかりだからである。しかし私は敷布団や掛布団をつけ加えようとは思わない。その中には蚤が入っているからである。（第十一信 P156）

例3 この湿気の多い気候のもとで、私は現在の弱った健康状態で、一度に二日か三日も気分よく旅行することは不可能である。また、二晩も休息できるような美しく静かで健康的な場所を見つけることは困難であろう。蚤や蚊からまったく解放されることは、とても望むべくもない。しかし、蚊は処によって数が多かったり少なかったりする。蚤の方は、何とか避ける方法を発見した。それは一枚の油紙を畳の上に六フィート平方に敷き、その縁に一袋のペルシャ除虫粉をまく。その真ん中に私の椅子を置くのである。（第十九信 P229）

例4 下層階級の男性の多くは、非常に醜いやり方で髪を結う。頭の前部と上部を剃り、後と両側から長い髪を引き上げて結ぶ。油をつけて結び直し、短く切り、硬い曲げを前につき出し、もとどりの後に沿って前方に曲げてある。（第六信 P71）

例5 群集は言いようもないほど不潔で

むさ苦しかった。ここに群がる子どもたちは、厳しい労働の運命をうけついで世に生まれ、親たちと同じように、虫に喰われ、税金のために貧窮の生活を送るのである。彼らのおとなしい、裸で時代おくれの姿を見ていると、どうして貧乏人の子どもが、かくも多くあふれるのか、と疑問が出てくる。(第十二信 P158)

例6 道路は馬車が二台通れるほど《私たちは馬車にはお目にかからなかったが》広がったが、よくはなかった。両側の溝はきれいでもなく、臭いもよくないことが多かった。こんなことは書いてよいものかどうか分からないが、家々はみずぼらしく貧弱で、ごみごみして汚いものが多かった。悪臭が漂い、人々は醜く、汚らしく貧しい姿であったが、何かみな仕事にはげんでいた。

例7 昨晚、隣の家で二歳半の子どもが魚の骨を呑みこんでしまい、一日中泣きながら苦しんでいた。母親の嘆きを見て伊藤(通訳 筆者註)はすっかり気の毒がり、私を連れて行って子どもをみせた。母親は十八時間もうろうろしているばかりで、子どもの喉の中を調べてみることに少しも思いが及ばなかったという。私が喉の中を調べることをたいそう嫌がっていた。骨はすぐ見えたので、レース編みの針で簡単に取り除くことができた。(第十三信 P174~175)

例8 宝沢と栄山に來ると、この地方の汚さは、最低のどん底に到達しているという感じを受ける。鶏や犬、馬屋人間が焚き火の煙で黒くなった小屋の中に一緒に住んでいる。堆肥の山からは水が流れて井戸に入っていた。幼い男子は何も着ていなかった。大人でも男子はマロ(ふんどし)だけしか身につけておらず、女子は腰まで肌をさらしており、着ているものといえば、たいそう汚れたもので、ただ習慣で身にまとっているにすぎない。大人は虫に刺されたための炎症で、子どもたちは皮膚病で、体中がただれている。彼らの家屋は汚かった。(第十四信 P179)

例9 山の中にふたたび入り、黒沢に出た。私はそこに泊ろうと思っていた。しかし、宿屋はなく、しかも旅人を泊める農家は、不健康な池の端にあり、暗くて煙が立ちこめて苦しく、ひどく汚い上に、蚊や虫がいっぱいだったので、私はぐったり疲れきってはいたが、なおも旅を続けざるをえなかった。…中略…休息できるような家はなかった。…子どもたちははらくも頭に疥癬で、眼は赤く腫れている。(第十七信 P206~207)

こうした記述は、バードのみでなく、民俗

学の調査資料報告書からも読み取ることができる。例えば、産屋に関わる資料や出産にまつわる資料の蓄積は多い。

以上の研究成果は別途、『近代における女性教育と衛生観の形成—婦人雑誌情報のデータベース化—』(全404P)を冊子にて公開している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

申請タイトルでの報告書論文は近刊の報告書参照。その他、21年度分の論文は以下の通り。

〔雑誌論文〕(計4件)

亀井好恵：「都市周辺漁村における女性の民俗芸能」『神・人・自然—民俗的世界の相貌』田中宣一先生古稀記念論集編纂委員会編 254-269頁 慶友社 2010年

査読 有

亀井好恵：「女相撲の観客論—明治期以降の新聞・雑誌記事から見る観客飯能を中心に」『民俗文化の探究』45~60頁 岩田書院 2010年

査読 有

鈴木明子：「縦から横へ—身体技法で読み解くお産の伝承—」『民俗文化の探究』311~328頁 岩田書院 2010年

査読 有

倉石あつ子：「民俗地図再検討試論—民俗地図作成過程における妊娠中の食物禁忌—」『民俗文化の探究』161~177頁 岩田書院 2010年

査読 有

〔学会発表〕(計3件)

鈴木明子：大和魂なヤンキー—ヤンキー座り— 伝承文化研究会 2009年10月23日

倉石あつ子：「続民俗地図に見る妊娠中の食物禁忌」 民俗地図研究会 2009年6月22日 於國學院大學大学若木タワー大学院研究室

鈴木明子：「生理の伝承」 伝承文化研究会 2009年4月24日 於國學院大學大学若木タワー大学院研究室

〔図書〕(計1件)

倉石あつ子：『女性民俗誌論』509頁 岩田書院 2009年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

倉石 あつ子 (教授)

研究者番号：60316669

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

泉 雅博 (IZUMI MASAHIRO)

跡見学園女子大学・文学部・教授

研究者番号：80245141

亀井 好恵 (KAMEI YOSHIE)

成城大学・民俗学研究所・研究員

研究者番号：50449104

鈴木 明子 (SUZUKI AKIKO)

東洋大学・東洋文化研究所・研究員

研究者番号：40424642